



10.27 アンドレイ・バビーツキ記者報告会

終わりになきチェチェン戦争、 強権化に向かうロシア社会

日時：2005年10月27日（木） 18:00～21:00

場所：文京区民センター3A会議室

報告：アンドレイ・バビーツキ（ラジオ・リバティー記者）

主催：チェチェン連絡会議

プーチン政権から目の敵にされながら、
無差別爆撃下のチェチェンの悲惨な実態を報道しつづけた
ロシア人ジャーナリスト、アンドレイ・バビーツキ記者、ついに来日！

1994年から断続的に続くチェチェン戦争。私たち「チェチェン連絡会議」は、この戦争による、チェチェン市民に対する人権侵害を広く知らせるために、アンドレイ・バビーツキ記者を日本に招聘し、チェチェンと、プーチン政権の現状について報告します。

バビーツキ記者は、99年の第二次チェチェン戦争が始まって以来、嚴重に封鎖されたチェチェンに潜入し、ラジオを通じてレポートしてきました。その活動に業を煮やしたロシア政府は、2000年の2月に彼を拘束、「非合法武装勢力の一員だ」として、チェチェン人たちに引き渡す場面を仕組んで放送させました。「バビーツキ事件」です。

チェチェン内部に入り込む現場主義とプーチン政権に対する問題意識。混迷するチェチェン情勢を語るのにふさわしい人物、バビーツキ記者による緊急来日講演です。

●タイムスケジュール

18:00	開会
18:00-18:05	司会挨拶
18:05-18:25	バビーツキ記者紹介
18:25-19:35	バビーツキ記者講演
19:35-19:45	休憩
19:45-20:45	質疑応答
20:45-21:00	主催者アピール

●報告者／司会者プロフィール

アンドレイ・バビーツキ：1964年9月モスクワ生まれ。国立モスクワ大学で文学を専攻。ペレストロイカ期に人権活動に加わり、87-89年に「グラスノスチ財団」機関紙の編集員を務める。89年に米国系放送局「ラジオ・リバティー」記者となり、93年の「ホワイトハウス砲撃事件」なども取材。第一次チェチェン戦争では、特派員として、無差別爆撃の続くチェチェンから直接レポート。首都グロズヌイ陥落後も取材を続けた、ただ一人の記者。最近、チェチェンの最強硬派野戦司令官バサーエフのインタビューを敢行するなど、活躍は現在も続いており、ロシア政府から激しい圧力を受けている。

林克明（ジャーナリスト）：当招聘のコーディネータを務める。1995年よりチェチェン現地取材を19回にわたって敢行。著書に写真集「チェチェン屈せざる人びと」（岩波書店）、「チェチェンで何が起きているのか」（高文研）などがある。

青山正（司会）：市民平和基金、ピースネットニュース代表。1988年以来、市民運動のネットワーク紙「ピースネットニュース」を発行している。1995年に日本山妙法寺の寺沢潤世上人の知らせによりチェチェン問題を知り、同基金を立ち上げた。現在チェチェン連絡会議代表。

目 次

アンドレイ・バビーツキとは誰か?	3
インタビュー：ジャーナリスト、アンドレイ・バビーツキへのインタビュー	4
アンドレイ・バビーツキ	
インタビュー：恐怖の時代	7
シャミーリ・バサーエフ　チェチェン野戦司令官	
チェチェン基礎知識	11

主催団体：チェチェン連絡会議とは

「チェチェン連絡会議」は、チェチェン戦争の平和的解決のために活動している NGO と個人が集まり、この問題への関心を日本の社会で喚起するために、2005年6月に結成されました。この戦争を少しでも早く終わらせるために、日本の国内でロシア軍の侵攻に反対する声を高め、各国の支援組織との連携を深め、国際世論としてのチェチェン戦争反対、ロシア軍の撤退を強く要求していきたいと考えています。ぜひ皆様のご協力と、参加をお願いします。

●問い合わせ先：

146-0082 東京都大田区池上 6-30-17 TEL/FAX：050-3329-3951

メール：clc@chechennews.org (連絡会議・集会問い合わせ)

メール：chechen_network@hotmail.co.jp (ボランティア問い合わせ)

ウェブサイト：<http://chechennews.org/>

郵便振替口座：00180-6-261048 口座名称：チェチェン連絡会議

●アンドレイ・バビーツキとは誰か？

「アンドレイ・バビーツキについて」

ラジオ・リバティー

出典：<http://www.rferl.org/specials/russia/babitsky/biography.asp>

1964年9月26日モスクワ生まれ。モスクワ国立大学で文学を専攻。ペレストロイカ期に人権運動に携わる。1987年から1989年に雑誌『グラスノスチ』の編集委員を務める。この時期バビーツキは人権運動に参加したことで当局に逮捕されている。

1989年にはラジオ・リバティーの記者となり、1991年8月のクーデター時にロシア連邦議会庁舎から報道することで、ラジオ・リバティーの社長から「1991年8月19-23日に生死を賭けて報じた傑出したジャーナリズム」を評価され、受賞。

1993年10月には、ラジオ・リバティーの議会記者として、議会への総攻撃（注）について報道。また、タジキスタンや北コーカサスの紛争地帯への取材も行った。第一次チェチェン戦争では、直接戦闘地から報道を行うラジオ・リバティーの特派員となる。

1996年から1999年までは、モスクワおよび北コーカサスの取材を行っている。1999年8月には（チェチェン野戦司令官による）ダゲスタンへの軍事侵攻を取材。1999年11月以降は、チェチェンの首都グロズヌイから報道するラジオ・リバティーの特派員になる。バビーツキはロシア政府がグロズヌイを攻撃してからも荒廃したチェチェンの首都に留まり続けた唯一の非チェチェン人ジャーナリストであった。

既婚。二人の子どもがいる。



注：1993年9月21日、ロシアのエリツィン大統領が憲法を改正し、最高会議と人民代議員大会の活動を停止させる大統領令を布告。翌日にロシア最高会議が大統領を罷免するが、25日には最高会議ビルの電話・水道・電気が切られ、最高会議派が孤立状態になる。28日からはロシア内務省のモスクワ市当局が、代議員の立てこもる最高会議の敷地を特殊部隊や軍や警察を動員、包囲し、政府軍が装甲車を配備するなど緊張が高まった。10月2日にはモスクワ市のロシア外務省近くの広場で議会支持のデモ隊と内務省の軍・特殊部隊が衝突して1名が死亡。10月4日、ロシア軍が最高会議ビルに立てこもる反大統領派に対して総攻撃を開始し、8時間にわたる銃撃戦ののち、最高会議ビルで49名が死亡した。

●「ジャーナリスト、アンドレイ・バビーツキへのインタビュー」

アンドレイ・バビーツキ ラジオ・リバティー記者

プラハ・ウォッチドッグ

2001.03.01 プラハ・ウォッチドッグによるインタビュー

出典：<http://tchetchenieneparis.free.fr/text/Babitsky%201-3-01.htm>

ラジオ・リバティーの記者アンドレイ・バビーツキへの本インタビューは、2001年3月1日、プラハにて行われた。抜粋版は以下の通り。インタビューの全文は、「私はソビエト連邦ではなく新しいロシアで生きてみたい」（注1）を参照のこと。

現在ジャーナリストはチェチェンでどのように活動しているのでしょうか？チェチェンには許可なしに入ることができるのでしょうか？それとも何らかの許可証が必要なのでしょうか？

一定の手続きが必要です。ジャーナリストにはロシア軍のプレスセンターから許可証を取得するために必要な許可証が与えられます。チェチェンに入るジャーナリストは誰もがプレスセンターで登録を行わなければなりません。実際、現在チェチェンに滞在しているジャーナリストは、ロシア軍司令部のあるカンカラのプレスセンターで業務を行っています。実質上、ここには例外はありません。外国人がチェチェンに入国する機会はありません。違法に入国したり、たいてい飛行機やヘリコプターに乗ってモスクワからチェチェンに入ってくる大旅団に加わることができれば別ですが。この集団は、戦争の栄光と「ポチョムキン村」をめぐる、ロシア政府主催の観光旅行に来ているのです。

一人でチェチェン共和国を移動することは事実上不可能です。カンカラに登録されていないジャーナリストは多くの居住地に行くための許可が得られません。一方、カンカラに登録されてしまえば、プレスセンターの職員たちに引率されずにチェチェンを回ることはできません。その結果、ロシアのジャーナリストに今できる仕事といえば、当局の情報そのままの報告書を書き上げること、つまり、当局の現実認識を丸写しすることです。外国の報道陣は仕事をすることもできませんし、違法な方法でリスクを背負ってチェチェンに潜入しようとすれば大変危険なことになります・・・。チェチェンに関しては深刻な戦時中の政治的検閲もあります。プレスセンターがあらゆる出版物を検閲し、

その結果問題がないとされた報道陣にはチェチェンへの再入国が許可されるのです。より正確に言えば、チェチェンではなく、カンカラの管轄地、ということですが。実際、ジャーナリストがカンカラの司令部ですることというのは、行きに乗ってきた管理された飛行機やヘリコプターの中で、何週間もただ座って待っていることなのです。ときおり、プレスセンターの職員が、精鋭隊と一緒に報道陣や個人を引き連れて、装甲車や戦闘用ヘリコプターに乗り、いわゆる掃討作戦に同行します。いかにチェチェンがジャーナリストにとって閉ざされているか、お解りでしょう。

ロシアの戦時特派員として、ジャーナリストとして、もっとも困難なことは何でしょうか？

今日のロシアでは、報道されるべきことが多くあるにもかかわらず、戦時特派員は厳しい状況に置かれています。ジャーナリストの大半は、完全に自主的に、すなわち当局からの何の圧力もなしに、公式な見解というものを受け入れてしまっています。それは自主性ではなく彼らの態度の裏側にある誠意であるとさえ言えるでしょう。チェチェンにおいて守られているものはロシアとロシア連邦の将来にとっての国益であり、政府は真の危機を食い止めるために軍事作戦を遂行しているのだ、と当局は発表しています。そして、モスクワで1年半前に起きた爆弾事件のショックから、多くの人々がそのことを信じるようになってきています。あっという間に、チェチェン人が多くの人々にとって唯一の「犯人」になってしまいました。もっとも私の知る限り、これまでにチェチェン人が犯人であるということを示す信頼できる証拠は何一つ挙がっていないのですが。ジャーナリズムは人々

の怖れや不安、希望を大量に反映する、社会の鏡のような職業です。したがって、ジャーナリズムは、チェチェン紛争に対する世論から一線を画することができませんでした。そして、ロシアにいる私の同僚の多くは、現在人権という問題を不毛なものだと考えているように私には思えます。というのは、彼らはもっと重要な仕事があると信じているからです。彼らは当局や軍隊と一緒に、自分たちの国を守るために戦わなければなりませんし、ロシア連邦は一つの国であるという教条を守らなくてはならないのですから。

私の考えでは、ジャーナリストはつねに権力から一定の距離を置くべきなのです。誰もが従うべき基本的な原則というものがあると私は考えています。それは、人権が誰に譲ることもできないもので、国家の権力や、国家を自衛するという権利にさえ優先するという事です。したがって、チェチェン紛争に関して、私が重要だと考えるのは人権という視点です。市民一人一人よりも、人生の価値よりも、市民の民主的な権利よりも、国家の統一性を重要だと考えるような国は、強いはずがないと私は思っています。私が言いたいのは、抽象的で変わりやすい主権国家の権利よりも、極端に過大評価された架空の脅威から国家を守るために作り上げられた目的よりも、私たちは人権を尊重しなくてはならないということです。

ロシア大統領のウラジミール・プーチンがこれまでしてきたことのよい面と悪い面は何でしょうか？

それは難しい質問ですね。というのは、今日ではプーチンを語る上でよい面よりも悪い面の方が多からずです。プーチンのよい面を語ってみましょうか……。彼の行動には警戒すべき傾向が大いにありますが、それをもってプーチンを警戒すべきだとは言えないかもしれません。ある程度、彼は国家という装置に対する支配力を復活させることに成功したと思います。とはいえ、特に大統領を頂点とする権力の中央集権体制を構築し、連邦議会を無力化する過程において、プーチンは超法規的な手段に訴えてきました。こうした超法規的な手段は、いずれも社会に深刻な衝突を引き起こしてこなかったもので、こうした手段は必要なもので正当化されるのかもしれませんが、いずれにしてもこれらが超法規的なものであることに変わりはありません。こうした手段によって直接的に引

き起こされた人権侵害はまだありません……。明らかに、プーチンの最大の問題というのは、彼の権力の中にある否定主義です。彼の主要な目的が反対勢力との戦いであることはあまりにも明白です。いくつかの理由から、プーチンは、特にチェチェンにおける現実が当局の見解と異なる事実非常に苛立ちを感じています。公式なプロパガンダが描こうとしているようには物事が進まないという事実と直面して、彼は怒りを感じているのです。彼の警戒すべき傾向が現実化したとき、ロシアの状況は悪い意味で重大な方向転換をすることになるのではないかと私は危惧しています。そうなれば、ロシアは、復活し、現代風にアレンジされたソ連的な独裁主義を用いた、柔らかい専制によって支配されることになるかもしれません。実際に、これはある程度現実化していることです。こうした手法が全面的に用いられることはありませんが、NTVテレビ局の事件（注2）は、ウラジミール・プーチンが自身に対抗する少数者から権力を奪うという自己の主義をどれほど執拗に貫いているかということを示しています。ソビエト時代の人権運動に携わることで価値観が形成されてきた私にとっては、今後ともプーチンに好意を持つ理由はありません。彼はKGB（国家保安委員会）出身であることを誇りに思っています。私にとってはプーチンはロシアの過去の亡霊なのです。ですが、私が自分たちの国に見据えようとしているのは未来です。私は、ソビエト連邦ではなく、新しいロシアで生きてみたいのです。

チェチェンにおける紛争に話を戻しましょう。チェチェン紛争はロシアの人々の気質や精神に何らかの影響を与えているのでしょうか？チェチェン症候群といったようなものがあるのでしょうか？

チェチェン紛争は非常に悪い影響をもたらしています。密接に関連し合いながら進行している2つの作用があります。まずチェチェンの軍属が適応し、ロシアにも蔓延している、ある行動基準の浸透が挙げられます。警官やFSB（連邦保安局）、ロシアの兵士は、チェチェンで2、3ヵ月も仕事をすれば、家に戻ってきます。彼らは、それ自体がある程度の攻撃性を誘発するPTSD（心的外傷後ストレス障害）に苦しめられるだけでなく、それまでとは異なる行動基準を受け入れるように

なっています。彼らは、暴力が犯罪者や犯罪者容疑者を扱う上で非常に有効な道具であると考えています。こうした基準が浸透することによって、広範囲に及ぶ深刻な結果が生じています。その影響は一般の人々が気づかないうちにすでに広がり始めています。しかし、ロシアはすぐにこの点に関して巨大な問題に直面するでしょう。

二点目はおそらくさらに重要です。チェチェン戦争を始めるために、プーチンは人々の負の感情を刺激する極めて効果的なキャンペーンに着手しました。ロシアの人々は人種的なプロパガンダをあてがわれたのです。チェチェン人が民家に爆弾を仕掛けたり、人質を拷問したり、人身売買を行ったりするのであれば、彼らを人間として扱う義理はないということを、プーチンは明言しました。そうしたプロパガンダによると、チェチェン人およびチェチェンの文化と社会生活の伝統は、ヨーロッパやロシアの法理の対極にあるため、チェチェン人はそれに値するやり方で扱われるべきだということになります。

最後になりますが、プーチンは教養に欠けるKGBの代理人らしく、ロシアがキリスト教とイスラム教という衝突する2つの文明の緩衝地帯になっているという非常に原始的な終末論的思想を信じ込んでいます。こうした考えは今日のロシア全体の文化の一部になってしまっています。路上だけでなく、ある知識人集団の中にも見られるこうした人種差別の仕方は、2年前であれば恥ずべきものとして一般的に考えられていたものでした。ロシアの知識人が、怖れを知らない劣等民族としてチェチェン人のことを語ることさえあります。言い換えれば、今日ではロシア人の内面において、民主的な基準というものが変化してしまっているのです。そして、譲ることのできない最小限の民主的自由というものさえ、チェチェン戦争によって大きく蝕まれてます。

将来的にチェチェンとロシアが一つの国家として共存できる見通しはありますか？

チェチェンとロシアが一つの国家として共存していくことは不可能だと、現在私は考えています。両国間にはあまりにも多くの問題があります。正確に言うなら、個人間ではなく二つの社会の間の問題、ということですが。紛争が完全に収束すれ

ば、ロシアとチェチェンは普通に協力し合えるようになる、私は信じています。しかし、前述のように、私たちは数え切れないほどの社会的な問題を抱えています。ロシアがチェチェンを単一国家の枠組みに留まらせておくための方法の一つしかありません。それは、戦争犯罪人および人道に対する罪を犯した者が例外なく罰せられることです。その意味では、国家の代表であるプーチンは、まず自分自身を罰することから始めなければなりません。軍事作戦中に多数の犯罪が行われるような政治的手法に対して、最高司令官であるプーチンは最終的な責任を負っています。ご存知のように、死者の記憶は、大勢の人々が銃殺され、裁判なしに処刑されたという記憶は、決して色褪せることはありません。必要な法的手続きに着手する必要性をロシアが感じるようにならない限り、チェチェン人が自分たちのことを十分な権利を保障されたロシア市民であると信じることもないでしょう。公正な裁判を受ける権利や犯罪者に裁きを求める権利が奪われ続けている以上、彼らの恨みは何十年経ってもなくなってしまうでしょうし、ロシアで生きていくこともできなくなってしまうと、私は考えています。おそらくチェチェン人自身、今はこのことに気づいていないでしょうが。彼らは巨大な圧力鍋の中で拷問を受けているのです。チェチェン人はロシア人と共に生きていくために自らをロシアに合わせる努力をしていますが、私には彼らが成功しているようにはまったく思えません。ロシアがチェチェンから撤退すればすぐにでも、チェチェン社会は再びロシアから独立しようとし始めるでしょうし、市民社会としていつそう人権侵害に対する戦いを行う必要性を感じるようになるでしょう。公正な法手続きと犯罪者への裁きが実現する見込みは、今日のロシアでは非常に薄いのですが、あと10年から15年後にはいつそう薄くなるでしょう。現時点をもって、チェチェン人は自分たちとロシアが共存できないということに気づいてしかるべきなのです。プーチンは錯覚に陥っています。彼は力にもとづく政治的圧力を用いることで問題が解決できると信じているのです。しかし、事実はまったく逆なのです。憎悪はますます強くなってきていますし、新しい問題も起こってきています。

注1：
<http://www.watchdog.cz/index.php?show=000000-000004-000002-000008&lang=1>

注2：NTVは3つのロシア主要テレビ局のうち唯

一の独立テレビ局であったが、プーチンはNTVの社長（当時）グシンスキーを2000年6月に拳銃不法所持の名目で逮捕・脅迫し、出所と引き替えにNTV株を政府系ガス会社に譲渡させた。2001年4月からNTVは実質上政府の掌握下に置かれている。

● 「恐怖の時代」

シャミーリ・バサーエフ チェチェン野戦司令官

ABC News Nightline

2005.07.28 放送 インタビューアー：アンドレイ・バビーツキ

（インタビューは2005.06.22に北コーカサスで行われた）

出典：<http://abcnews.go.com/Nightline/International/story?id=990187&page=1>

ABC NEWS：今夜は「恐怖の時代」、シャミーリ・バサーエフの独占インタビューをお届けします。シャミーリ・バサーエフの名をご存知ない方もいるかもしれません。しかし、すでに（モスクワ劇場占拠事件やベスランの学校占拠事件に）見られるように、彼の手がけた血まみれの事件は全世界に知れ渡っています。すべての行為はチェチェンの独立とロシア占領軍の撤退のためだと主張しているバサーエフ本人でさえ、自分がテロリストであることは認めているのです。ロシア政府は様々な手段を講じて、私たちに今夜のインタビューの放映を断念させるよう仕向けてきましたが、それも別段驚くべきことではありません。あるロシア人外交官が先日私に語ったところによると、それは政府のトップレベルにおける最重要事項だということでした。つまり、放映に対する圧力は、ほぼ確実にウラジミール・プーチン自身の意向だと言えます。（中略）このようなインタビューは、このまま埋もれさせずに、適切な形で放映されなければなりません。

ABC NEWS：ロシアのジャーナリスト、アンドレイ・バビーツキによるバサーエフへのインタビューをお届けします。バビーツキはロシアでよく知られている人物です。彼はロシアによるチェチェン攻撃が始まってからも首都グロズヌイに留まり続けた、チェチェン人以外では唯一のジャーナリストです。バビーツキは一度ならず、彼の報道をチェ

チェン側に偏向したものと見なすロシア政府によって逮捕・抑留されています。

ABC NEWS：バサーエフは長いことロシアにとってのお尋ね者となっています。彼の首には1000万ドルの賞金がかけてられています。1995年にロシア軍は彼の兄弟と妻、2人の娘を含む11人の親戚を殺害したと発表しました。2000年初頭、チェチェンの首都グロズヌイがロシアによって攻撃されたとき、ロシアによる地雷敷設地帯を横切って退却を指揮していたバサーエフは、足の一部を失いました。彼はいま義足をつけています。彼はまた時限装置の起爆スイッチとしてよく用いるデジタル時計を好んで身につけています。

バビーツキ：「教えてください。あなたは世界で二番目にお尋ね者になっているテロリストです。どうやってこんなに長く生き延びてこられたのですか？」

バサーエフ：「まず始めに言うておきますが、私は二番目ではありません。それから、私はお尋ね者でもありません。私自身がテロリストを見つけ出そうとしているのです。私がロシア中のテロリストを探しているのです。これからもテロリストを探し出し、罰を下していきます。私がお尋ね者であるなどと言わないでください。私こそがテロ

リストを探しているのですから」

バビーツキ：「あなたが望むように、ロシアがチェチェンから撤退したら、誰がチェチェンを統治すべきなのでしょう？」

バサーエフ：「最初に思い浮かぶのは、『人々に力を』という言葉です。私自身は権力を求めたことはありませんし、権力のために戦ったこともありません。私はつねに正義のために戦ってきました。私が求めているのは正義だけなのです。正直なところ、私は自分が追われているようにはまったく感じていません。ですが、私は戦士で、つねに、今このときでさえ、命を捨てる覚悟ができています」

バビーツキ：「あなたは何を当てにしているのでしょうか？テロによってロシア政府から譲歩と交渉を引き出せると本気で考えているのですか？」

バサーエフ：「交渉など必要ありません。チェチェン人に対するジェノサイドを止めたいだけです。チェチェンを占領している人でなしどもにも出て行ってもらいたいただけなのです」

ABC NEWS：ただいまロシア政府がこの放映に対する公式なクレームを出してきました。

バサーエフ：「チェチェンの将来を担う世代の人々が、1944年に起こったように（注1）、シベリアに送られないという保証が欲しいのです。そのために私たちは独立する必要があるのです。事実、あの強制連行がジェノサイドだったことは全世界が認めています。テロリストはロシア人たちの方なのです。チェチェンの独立戦争はこれからも続くでしょう」

バビーツキ：「ベスランの件（注2）ですが、あの作戦の潜在的な可能性やプーチンの反応をどう評価するかに関わらず、子どもたちの命を危険にさらしたことが、彼らに水さえ与えなかったことが、正しいことだったとあなたは考えているのでしょうか？あなたはプーチンと責任を共有するべきだと思いますか？」

バサーエフ：「プーチンと責任を分かち合う義理などありません。チェチェンでは、公式に発表されているだけでも、4万人以上の子どもたちが殺され、何万人もが負傷しているのです。そのことについては誰もが沈黙しているではないですか」

バビーツキ：「だから今度はロシア人の子どもたちの番だというわけですか？」

バサーエフ：「責任を負うべきは子どもたちではありません。責任を負うべきはロシアという国家全体であり、（チェチェン侵略に対する）無言の同意はロシアに加担することと同じです。ロシアは国を挙げて、チェチェンを破壊する侵略者を養っています。彼らには、食物が、物資が、必需品が、税金が、与えられています。言行一致で（チェチェン侵略に）賛成しているすべての人々に責任があるのです。正直なところ、ベスランで起こったことは私の予想外でした。しかし、ベスランでの争点は、チェチェン戦争を終わらせるか、プーチンを辞任させるか、ということでした。どちらでもよかったのです。いずれか一方の要求が受け入れられれば、無条件で人質を解放するはずでした。お解りでしょうか。ただそれだけだったのです。なぜあんな事件を起こしたのかと言うかもしれませんが、それはチェチェンで何千人もの子どもや女性、老人が殺戮されるのを食い止めるためです。事実を直視してください。彼らは（ロシア軍に）誘拐され、連行され、殺害され続けているのです」

バビーツキ：「つまり、子どもたちを直接撃たなければ問題ないということですか？子どもたちの命を危険にさらすのは、殺害に関与することとは別だということですか？」

バサーエフ：「このジェノサイドを食い止めるためになら、容赦するつもりはありません。ただし私の信じる宗教が許す範囲で、ということですが。私の宗教では、次のようなアッラーからの言葉がコーランに書かれています。『やられたように、やり返せ。ただし、やり過ぎてはならない』（注3）。私は過剰な報復をしないようにしていますし、これまでもそうしたことはありません」

バビーツキ：「ベスラン（の学校占拠事件）の後、どんな気持ちを味わいましたか？」

バサーエフ：「正直に言えば、衝撃を受けました。誓いますが、あんな結末は予想だにできなかったのです。プーチンが自ら血に飢えていることを宣言してしまうほど血に飢えているとは思ってもみませんでした。（中略）とはいえ、少なくとも子どもたちには何もしないだろうと考えていたのです」

バビーツキ：私は、ロシア軍が突入するきっかけとなったベスランの校内で起きた爆発についてバサーエフに尋ねました。彼が言うには、体育館にいた、爆発物の起爆装置を足で抑えていたチェチェン人が狙撃兵に撃たれたということでした。導火線は（爆発しないように）つねに踏まれた状態になっていたのですが、彼が撃たれて倒れたときに、導火線が足から離れて爆発が起こったというわけです。

ABC NEWS：2002年10月、40名以上のバサーエフのゲリラ部隊がモスクワの劇場を占拠しました。バサーエフはこの行為（に参与したこと）を認めています。しかし、彼は流血の事態が発生したことについて、再びロシア側を非難しています（注4）。

バサーエフ：「私は外国人を無条件で全員解放するよう部下に言っていました。そう命令していたのです。しかし、解放したからといって、彼らが安全な場所まで避難できるわけではありません。解放しても私たちが彼らを殺したかのように見られてしまいます。そこで、人質全員に大使館へ電話をさせ、劇場の扉の前まで車をよこさせてから彼らを解放しようとしたのです。しかし、多くの人質は外に出させてもらえませんでした。私にどうしろと言うのですか。私は何でもしますが、それは自分で制御できる範囲の事柄に限られます。チェチェンでも他のどこでも、私はつねにフェアな手段を用いてきました。私の部下のイスラム戦士たちは、チェチェンでもロシアでも子どもは殺しません。事実、（子どもの）殺害は行っていないのです。2004年の1月に入ってすぐに、私は公式の声明文を出しました。私はプーチンに対して、『（中略）プーチンおよびロシア軍が国際法

に則って行動することを正式に表明するならば、我々もロシア領内におけるいっさいの攻撃と爆破行為を停止する』ということを表明したのです。

（中略）それに対するプーチンからの答えはどうかだったのでしょうか。人質を取るといふところの話ではありませんでした。殺戮以上のことが始まったのです。（チェチェンへの）全面的な破壊が進行しています」

バビーツキ：「あなたにとってこれは独立戦争なのですか？」

バサーエフ：「逆にあなたにとっては何なのか？」

バビーツキ：「私には宗教的な動機もあるように思えますが」

バサーエフ：「違います。私にとって最も重要なのは独立戦争だということです。自由がなければ信仰を持って生きることもできません。人間には自由が必要です。まずは自由ありきだと私は思っています。イスラム法はその次です。（中略）ロシアは今年に入って二度、私を毒殺しようとしました。戦闘もいくつもりましたが、私の持ち時間はまだ終わってはいません」

バビーツキ：「ベスラン（の学校占拠事件）や（モスクワの）劇場（占拠事件）のような行為を繰り返す可能性はありますか？」

バサーエフ：「もちろんです。チェチェン民族に対するジェノサイドが続く限り、この混乱が続く限り、どんなことでも起こるでしょう。確かに私は悪党かもしれません。盗賊で、テロリストだと言ってもよいでしょう。そう、私はテロリストです。ですが、ロシア側はどのようなのですか。彼らが憲法による秩序を守っているというなら、彼らがテロリストと戦う側だというなら、私はそんな約束事や美辞麗句に対して唾を吐きかけてやります。全世界が私に唾を吐きかけてくるなら、私も全世界に唾を吐き返してやります」

バビーツキ：「ここ最近は大きな事件が起こっていませんね。あなたは何か新しいことを計画して

いるのでしょうか？それともしばらくは気楽に構えているということですか？」

バサーエフ：「私は一瞬でも気楽に構えたりはしません。冬の間に一息ついただけでも充分です。いま私は計画を立てています。今に解るでしょう。私たちはつねに新しいやり方を模索しています。失敗したとしても、そのたびに新しい発見が得られることでしょう。いずれにしても目的は達成してみせます」

注1：チェチェンは18世紀にロシアに併合され、ソビエト連邦の成立後はチェチェン・イングーシ共和国としてソビエト連邦共和国の一部とされたが、第二次世界大戦中の1944年2月、スターリンによって対独強力の疑いをかけられ、カザフスタンやシベリアへ強制移住させられた。このとき、50万人ほどの人口が、流刑地からチェチェンに戻ったときには半減していたと言われる。

注2：2004年9月1日、ロシアの北オセチア共和国のベスラン第一中等学校が武装集団によって占拠され、7歳から18歳の少年少女とその保護者、1181人が人質となった。3日間の膠着状態ののち、ロシア治安部隊が学校に強行突入し、350人以上が死亡、700人以上が負傷者する大惨事となった。シャミーリ・バサーエフは、Webサイトにおいて、ベスラン学校人質事件への関与を認める声明を発表している。

注3：「これ、信徒のものよ、殺人の場合には返報

法（いわゆる「目には目、歯に歯を」）が規定であるぞ。つまり自由人には自由人、奴隷には奴隷、女には女（つまり一人に対して同格のもの一人の復讐である。一人殺されたのに、その復讐として相手側の人々をむやみに幾人も殺すというイスラム以前のならわしはもはや許されない）。しかも（殺人を犯しても）、同胞（相手の当事者）が許すといった場合（復讐として犯人を殺すかわりに、いわゆる「血の価」——例えば駱駝何頭の支払い——で満足する場合）には、（復讐者の側では）正々堂々とことをはこばねばならないし、また（本人の方でも）立派な態度で償いの義務を果すのだ」（「コーラン」、第二章第一七八節、岩波文庫）。

注4：2002年10月23日、モスクワの劇場、ノルドオストでチェチェン・ゲリラを名乗る者たちが、700人以上の観客らを人質に取り籠城、チェチェンからのロシア軍の撤退を要求した。25日にノーヴェヤ・ガゼータ紙のアンナ・ポリトコフスカヤ記者が犯人と交渉し、ロシア軍の一部撤退を条件に犯人側は翌26日の朝に人質を解放することに合意するが、同日早朝に特殊部隊が軍用ガスをまきながら突入。犯人グループを射殺した。軍用ガスにより観客の多くが意識不明の重態に陥り病院に運ばれたが、ガスの種類がわからないと適切な治療できないとして病院の医師が当局に問い合わせると「機密だから教えられない」と断られ、このため129人が死亡した。犯人側に殺されたと当局が発表した人質の数は4人だった。

チェチェン基礎知識

大富亮 / チェチェンニュース



● 20万人が犠牲となったチェチェン紛争

紛争の舞台となっているチェチェンは、16世紀のイワン雷帝の時代から帝政ロシアの侵略を受け始め、19世紀にロシアが併合した地域。もともとは人種、言語ともロシアとは異なる（現在のチェチェン人はロシア語も話す）。併合後、現在にいたるまで、石油、農畜産物、兵役など、ロシアが必要とするさまざまな資源の供給源となってきた。

1991年11月、チェチェン出身のジョハルドゥダーエフ空軍少将を中心とするチェチェン民族会議が、ソ連邦からの独立を宣言した。それ以来、チェチェンは事実上の独立状態にある。この独立運動は、長年の植民地支配に対する異議申し立てだったが、94年にロシア軍が武力侵攻で応じたため、戦争（第一次、第二次チェチェン戦争）となった。この戦争で、およそ100万人のチェチェンの人口のうち、8万人から10万人が死亡したと言われている。

96年にいったん戦争は終わった。このとき結ばれた「ハサブユルト和平合意」では、チェチェンの国家としての地位は5年後の2001年にふたたび検討されるはずだったが、99年にロシア側は合意を無視し、二度目の武力侵攻（第二次チェチェン戦争）を開始した。前回以上に無差別かつ大規模な、チェチェンの民間人への攻撃が続いており、隣国のイングーシ共和国では、当初25万人、現在も5万人のチェチェン人が難民生活を続けている。親ロシア派、独立派が共に認める数字によれば、94年以来、10年間つづいているこ

の戦争の死者は20万人以上で、その多くは民間人である。

ロシア政府のチェチェンに対する態度を一言に言うとは、侵略によって得たチェチェンという植民地の独立を許さず、軍事侵攻を行い、ロシア側から見れば「ロシア国民」であるはずの、チェチェンの住民たちを無差別に殺戮した上で、「ロシアの内政問題」「国際テロとの戦い」という、矛盾するスローガンを掲げていることになる。

この戦争を続けているために、チェチェンはもとより、ロシア国内もさまざまな混乱に見舞われ続けている。市民を巻き添えにする自爆攻撃や、ロシア政府・情報機関が関与していると見られる「テロ」が相次ぎ、チェチェン問題を利用した中央集権化も進められている。

● チェチェン戦争の原因

くりかえしチェチェンで戦争が起こる理由はいくつか挙げられる。

1. ロシアの政治状況がチェチェン戦争を必要としている

エレナ・ボンネル女史（反体制物理学者サハロフ博士の未亡人）は、こう証言している。「第二次チェチェン戦争が勃発した主な原因を探るには、まず、現在のロシア政治情勢を理解しなければならない。第一次チェチェン戦争は、エリツィン大統領再選のために必要であった。今回の戦争は、エリツィン大統領が自ら選んだ後継者として公に支持する、ウラジーミル・プーチン現首相が世論調査で順位を上げるために必要とされている（米上院議会での証言）この結果、1999年の大晦日にエリツィン大統領は辞任してプーチン代行にその地位を譲り、大統領経験者の不逮捕特権を手にした。

チェチェン戦争は、戦争を必要としているロシアの軍部・情報機関を中心とする政治勢力「シラビキ（力の人々＝武闘派）」が主導している。彼らの利益は、チェチェン戦争に参加することによる合法・非合法の恩典によるものだ。これには戦争および復興予算の着服、現地での違法な石油密売への関与、チェチェン独立派への武器の横流し、現地住民の拘束と金銭による釈放（＝営利誘拐）などが挙げられる。

2. ロシア国家統一の維持

北コーカサスには、チェチェンのほかにダゲスタン、イングーシ、北オセチア、カバルディノ・

バルカリア、カラチャエボ・チェルケシアなどの民族共和国があり、チェチェンの独立が他の国々のロシアへの離反につながると、ロシアの国土の一体性が失われることが、ロシア連邦側の主張の一つである。しかし、1991年以來独立を主張したロシア連邦構成共和国はチェチェンとタタールスタンだけであり、すべての地域にチェチェンのような動きが出ることは考えにくい。

また、ロシアが、チェチェンを侵略によって獲得したことは歴史上あきらかであり、この地域の人々が民主的な手続きを経て独立を選んだ場合に、ロシア連邦側は、これに反対する資格を持たない。

3. 石油資源

イランとトルコが近く、軍事上の緩衝地帯である。資源面から見ると、チェチェンで原油を産するほか、カスピ海のバクー油田からのパイプラインが領内を抜けているため、ロシア側としてはチェチェンを自国のコントロール下に置きたい。

● 強制移住

コーカサス地域は、16世紀のイワン雷帝による侵略以降、帝政ロシア、ソビエトロシアの時代を通して植民地にされ、同化政策を強いられてきた。このコーカサスの山岳民のなかで、チェチェン人は、随一の独立志向を持つ。これが災いして、1944年2月、独ソ戦争のさなかにチェチェン人、イングーシ人がほとんど一夜にしてカザフスタンへ移住させられた。このとき、50万人ほどのチェチェン人が、流刑地からチェチェンに戻った時には半減していたと言われる。現在のマスハドフ大統領らの世代は、流刑先のカザフスタンで生まれた。

● 第一次チェチェン戦争

1991年のソ連邦崩壊の際、多くの連邦構成共和国が独立を宣言した。北コーカサスのチェチェン共和国でも独立の機運が高まり、同年11月、ジョハル・ドゥダーエフ退役空軍少将を中心とするチェチェン民族会議が独立を宣言した。これに対し、トルコ・イランに近いコーカサス地域の防衛、カスピ海からの石油パイプラインの確保という思惑のため、ロシアは猛反発した。政治的混乱が続いた末の94年12月、ボリス・エリツィン大統領（以下の役職名はすべて当時）の命令により「憲法秩序の回復」のために連邦軍が投入され、「第一次チェチェン戦争」が勃発した。

すぐにゲリラ部隊を中心としたチェチェン軍の抵抗が始まり、1年半の戦闘の末、ドゥダーエフ大統領は戦死（衛星電話を使ってロシア議員と交渉しようとしたところをミサイル攻撃された。爆弾という説もある）。一方ロシアでは、徴兵された若い兵士たちがチェチェンに送り込まれたことでロシア国内の厭戦気分が高まった。ロシア安全保障会議のアレクサンドル・レベジ書記と対ロシア交渉派のアスラン・マスハドフ総参謀長による和平交渉が行われた。この時結ばれた「ハサブユルト和平合意」（ダゲスタンのハサブユルトで結ばれた）により、96年8月31日に戦争は終わり、チェチェンの独立問題は2001年まで先送りされた。

● 戦間期

1997年2月、欧州安全保障機構（OSCE）、市民平和基金などの監視のもと、初のチェチェン共和国大統領／議会選挙が行われ、第一次戦争中に参謀を務めたマスハドフ氏が64%を得票して当選した。大統領就任後のマスハドフ氏はチェチェンの自立を追求してアメリカ、アラブ諸国などを外遊すると同時に、ロシアとの対等な関係作りを試みるが、難航。誘拐などの犯罪の横行により、国際機関の撤退も相次いだ。国内の各勢力の統合にも失敗したが、内戦だけは回避した。

● 第二次チェチェン戦争

99年春、チェチェンとロシアの定期会談がストップ。8月7日、チェチェン政府の統制を離れた野戦司令官のシャミーリ・バサーエフとハッタブが隣国ダゲスタンに侵攻した。これと並行して8月31日から、モスクワなどの都市では大規模なアパート爆破事件が続発し、ロシア政府はすべてチェチェン人の犯行で、犯人たちはチェチェンに逃亡したと発表した（しかしすぐに破壊された建物は撤去され、今にいたるも犯人は明らかになっていない）この二つの動きを受けて、9月23日ロシア政府は「テロリスト掃討」のため、再びチェチェンへの空爆を開始した。「第二次チェチェン戦争」である。

緒戦はロシア側の勝利が続いた。追い風を受けてエリツィンは大統領経験者の不逮捕特権を手に辞任、ロシア連邦保安局（FSB）の元長官、ウラジーミル・プーチンが大統領に就任した。その後はゲリラ戦と、ロシア軍および親ロシア派に対する爆弾攻撃が、これに対抗するロシア軍の「掃

討作戦」などが続き、泥沼化している。

2002年8月には、ロシア世論が停戦に傾いたことを反映し、ロシアとチェチェン双方の政治家たちによる非公式の会談が活発化した。また、2005年2月には、ザカーエフ・チェチェン共和国文化相（独立派）とロシア兵士の母親委員会のワレンチナ・メーリニコワ代表による、非公式の「対話」が、欧州議会ロンドン事務所で行われた。

しかし、和平のための話し合いが起こると、ほぼ確実にそれを挫こうとする事件が発生する。たとえば、2002年11月にはモスクワ劇場占拠事件が発生して対話は流れ、05年2月には和平交渉を訴えていたチェチェン共和国のアスラン・マスハドフ大統領（独立派）がロシア軍によって暗殺された。

なお、本稿では91年の独立宣言によってロシア連邦中央との紛争状態に入ったと考え、その後を「チェチェン紛争」と呼ぶ。独立宣言以降、二度戦争があったので第一次チェチェン戦争、第二次チェチェン戦争と呼ぶ。なお1500年代のイワン雷帝が開始した南東進出政策以降の恒常的な武力衝突は「コーカサス戦争」と呼ばれている。

● ジェノサイド

1999年9月以来、ロシア、チェチェン両軍の間で激しい戦闘が続き、チェチェンの首都グロズヌイは無差別爆撃によってほとんど廃墟となっている。もっとも憂慮されるのは、ロシア軍によるチェチェン市民への攻撃と、人権抑圧、ジェノサイドである。これは主に「掃討作戦」と呼ばれており、ロシア側が「テロリストを匿っている」と判断した村落を包囲し、住民のうち10歳から60歳代にいたる男性をすべて拘束して尋問を加え、場合によっては逮捕者の多数を殺害するというものである。ダチヌイ村では51人の民間人の死者が発見された事例があり、アメリカの人権NGO、ヒューマンライツ・ウォッチが詳細に報告したほかにも、多数の同様の事例が報告されている。

2005年2月24日、ロシア連邦も加盟している欧州人権裁判所で、チェチェン戦争によるチェチェンの民間人の被害が、ロシア軍の攻撃によるものだと、賠償を命じる判決が下りた。これは99年の、第二次チェチェン戦争開戦当時の民間人殺害や財産の損壊に関する数件の訴訟で、最終的にロシア側はチェチェン人の原告たちに賠償

金17万ユーロ（2400万円程度）を支払った

● 誘拐について

96年—99年の停戦期に、チェチェンでは誘拐事件が相次いだ。ロシア軍の侵攻を跳ね返したものの、チェチェンの物理的・経済的インフラが破壊された状態のままで、失業が蔓延していたためと見られている。主にターゲットとなったのはロシア人や外国人であった。

99年に第二次チェチェン戦争が始まった当初、日本のマスコミ、NGOには、在日ロシア大使館から「チェチェン人による人質殺害の現場」とされるビデオテープが何度か届けられた。筆者もその一部を見たが、チェーンソーによる首斬りなど、言葉にするのもはばかれるような残酷な内容だった。

この時期はエリツィン政権の最後の時期にあたる。現在、ロンドンに亡命しているロシアの政商ベレゾフスキーによると、彼は「エリツィン大統領の命令で、チェチェンに行って誘拐事件の解決にあたった」という。具体的には、多額の身代金の立て替えをしていた。

ベレゾフスキーの「立て替え」は、チェチェンの誘拐禍をさらに加速させた。外国人誘拐が唯一の産業とまで言われるようになったのである。また、ベレゾフスキーは復興資金として、野戦司令官に金を渡していたことを認めている。誘拐犯たちと、マスハドフ政府から離反した野戦司令官たちへの資金提供は、チェチェンの混乱をさらに助長させる役割しか果たさなかった。エリツィンの意を受けたベレゾフスキーの行動は、99年のバサーエフのダゲスタン侵攻へと繋がっていく。

● 「テロとの戦い」の文脈におけるチェチェン問題

2001年9月11日以降、ブッシュ政権が「テロとの戦い」を掲げ、世界を「テロに反対する国々」と、「テロを実行し、支援する国々」に二分しようとしたときに、チェチェンはその境界線上に置かれることになった。つまり、「抑圧されている少数民族」と、「分離主義のテロリストの二種類のレッテルを、その時に応じて貼り替えられることになったのだ。ロシアのプーチン大統領はいちはやくブッシュの「テロとの戦い」への支持を表明した。その結果としての中央アジア諸国とグルジアへの米軍駐留も呑んだ。チェチェン

を「対テロ戦争」の一部に位置付けることで、重度の人権侵害に対する欧米からの批判をかわすためである。

一方、アメリカ政府は、2003年2月、マスハドフら独立派中の主流派との交渉のオプションを残しつつ、チェチェン独立派の一部の部隊（シャミーリ・バサーエフら）に対して「テロ組織」というレッテルを貼ってロシアに歩調をあわせた。しかし、テロリストに指定されたバサーエフは、もともとロシア側とつながりのある人物である。

● マスハドフ政権とその終焉

第一次チェチェン戦争後の97年に選挙によって樹立された政権。この選挙は欧州安全保障協力機構（OSCE）などの選挙監視を受け、民主的な選挙が実施されたとして、国際的な承認を受けた。また、ロシア政府も承認した正式なチェチェンの政府である。大統領のアスラン・マスハドフは元ソビエト陸軍の砲兵大佐である。99年の二度目のチェチェン侵攻以降、ロシア側はマスハドフ政権に対抗して、親ロシア派の宗教指導者であるアフメドハッジ・カディオフ行政長官を首班とする臨時行政政府を設置した。このカディオフ行政長官は2003年10月の選挙で「大統領」に選出されたが、2004年5月にグロズヌイで爆殺された。その後は同じ親ロシア派のアルハノフ内相が大統領に就任した。

マスハドフ政権はロシア政府に対し和平交渉をよびかけ、アメリカ政府やOSCE、欧州評議会などが「チェチェン紛争の政治的解決」をロシアに要求する場合、その交渉相手は第一にマスハドフを指した。プーチン政権は99年にチェチェン戦争を開始した時点で、「マスハドフは大統領として認めない」という立場を示したが、これには具体的、法的な根拠がない。

アスラン・マスハドフは、2005年3月9日、ロシア軍特殊部隊に暗殺された。ここではその背

景と意味を述べたい。

2月2日、マスハドフ大統領が、チェチェン側部隊に対して、ロシア軍に対する一方的な戦闘行動の停止を命じた。同時に、コメルサント紙のインタビューで、マスハドフは、この停戦がロシアを交渉に呼び込むための「善意の表明だ」と語る。これに対してプーチン政権側は何も反応しなかった。逆にコメルサント紙に対して「テロリストの発言を報じた」などと警告する。停戦は、予定どおり2月22日まで続いた。停戦のねらいは、チェチェン側のゲリラ部隊のすべてがマスハドフに従っていると、ロシアと国際社会に示すことだった。実現すれば、交渉当事者としての資格が証明される。事実、これに呼応して、ロシアのNGO「兵士の母親委員会」のメリニコワ委員長らが、マスハドフの代理人であるザカーエフ文化相と、ロンドンの欧州議会代表部で会談した。これにかかった費用は、欧州議会が負担した。ここで「チェチェン戦争に軍事的解決はありえない」と明記した合意文書「チェチェンにおける平和への道」が採択されている。

民主的に選挙されたマスハドフ大統領が和平交渉を提起していたのは、ロシア側にとって頭痛の種だった。ロシア政府には、国際機関や西側各国政府と市民団体からの圧力が常にあった。そこから逃れるためには、マスハドフを消すしかなかった。

マスハドフの死のあと、アブドゥルハリム・サドゥラーエフが新大統領となり、首相を兼任すると発表された。副首相にはロンドンのアフメド・ザカーエフと、野戦司令官のシャミーリ・バサーエフが任命された。この人事についての考察はチェチェンニュース Vol.05 No.23 2005.09.04を参照のこと。

チェチェンニュースの購読（無料）はこちら
<http://chechennews.org/>